慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	コメント2
Sub Title	Comments 2
Author	小澤, 実(Ozawa, Minoru)
Publisher	三田史学会
Publication year	2011
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.80, No.2・3 (2011. 6) ,p.131(229)- 133(231)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム : 地中海世界の旅人たち : 中世から近世へ
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20110600-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

さて、エヴリヤ・チェレビーに関しては今世紀になって注目が集まってきた。トルコでは、厳密なる写本校訂と現代トルコ語訳による刊本の出版が行われ、またアメリカとトルコとを中心にその内容に関して国際的な研究が進められ始めている。その名が示すようにエヴリヤ・チェレビーは国家の貴顕の一人として、その域内移動は一般私人とは異なり、公的統制を受けずに、むしろ公的保護の下にあったと考えられる。またエヴリヤ・チェレビーの旅行記の記載には、単純に旅の記録ばかりでなく、各地の伝承など詳細な地方情報の集成や、自身の歩測による非常に細かい距離・規模の記載など内容に独自性が認められる。「公私」の観点からイスラーム中世の旅行記文学とその記載情報を比較すれば、エヴリヤ・チェレビーの旅行記、すなわちこの時代の旅行記の特徴がはっきりする可能性があるといえよう。

このように様々な視点から、イスラーム世界における「旅」をめぐる諸問題を検討するならば、人類史における「旅」の意味を解き明かすことの一助となるだろう。

コメント2

小澤　実

一二世紀から一七世紀の西地中海世界に事例を求めた関哲行氏に対し、わたくしは一〇世紀から一一世紀の北洋世界（北大西洋・北海・バルト海）から、スカンディナヴィア人（いわゆるヴァイキング）の海外展開という点にしぼって四つの事例を紹介したい。

第一の事例は九世紀末のノルウェー商人オウッタルである。彼に関する情報は、九世紀末にイングランドのアルフレッド大王の宮廷で編纂されたと思われる、オロシウス『対異教駁論』古英語バージョンの附論に収録されている。オウッタルは記録の中で三つの航海ルートを紹

介している。第一に彼の故郷があったと推測されるノルウェー北部からロシアの白海へといたるルート、第二にやはりノルウェー北部からノルウェー南部にある当時ノルウェー最大の交易地であったカウパングへといたるルート、第三にカウパングからデンマーク最大の交易地ヘゼビューへといたるルートである。商人であるオウッタルは、このような交易ルートを利用し、ロシア北部で得られる毛皮や海獣の牙などをカウパングやヘゼビューで売買していた。

第二の事例は紀元千年前後を生きたアイスランド人レイフ・エーリクソンである。彼にまつわる情報は一三世紀半ばにアイスランドで編纂された『赤毛のエーリクのサガ』と『グリーンランド人のサガ』という二つのアイスランド語史料に記録されている。レイフはグリーンランドより先に別の島が存在していたと主張するビャルニ・ヘリョールフソンの言を信じ、彼の船を手に入れて三五人の乗組員とともにグリーンランドの西方へ出航した。一〇〇二年から一〇〇三年にかけて彼ら一行は、現在のカナダにあるバフィン島からニューファンドランドに到達したと推測される。レイフの新大陸発見譚は、ニューファンドランドのランス・オ・メドで紀元千年前後の北欧人の居住地跡が発掘されることにより、歴史的事実としての可能性を考慮することのできる物語として現在理解されている。

第三の事例は一一世紀前半にロシアを越えて東方世界に遠征したスウェーデン出身のヴァイキング、イングヴァールである。彼の事績は『イングヴァールのサガ』ならびに、イングヴァールとともに東方遠征を行ったことを証言する三〇基を越えるルーン石碑で確認することができる。彼らは東方世界の富を求めて、故郷であるスウェーデンのウップランドを出立し、ガルザルと呼ばれるロシアに足を踏み入れた。『イングヴァールのサガ』その他の証言を信じるとすれば、イングヴァール一行は、ノヴゴロドをこえ、キエフから黒海へ至り、さらにはカスピ海周辺まで達し、現地で命を落とした。

第四の事例は一一世紀前半のスカルド詩人シグヴァト・ソールザルソンである。スカルド詩人とは、宮廷に寄食し、王や有力者らの遠征に同行して彼らを顕彰するスカルド詩を創作する、主としてアイスランド出身の詩人を指す。アイスランド人であったシグヴァトは、もともとノルウェー王オーラヴ・ハーラルソンの宮廷に仕えていたが、その後、デンマークとスウェーデンの間にあ

るヴェステルイェートランドの在地有力者ログンヴァルド、イングランドに滞在していたデンマーク王クヌート、スウェーデン王アーヌンド・ヤコブの宮廷を渡り歩き、ローマ巡礼を経て、最終的にはノルウェー王マグヌス善王の宮廷にたどり着いた。

以上、紀元千年前後のスカンディナヴィアから、交易、植民、略奪、寄食という四つの「旅人」の事例を挙げた。ただしこれらの事例を、関哲行氏が提示した三つの事例と単純に比較することはできない。たしかに地理空間という点では、関氏の地中海世界とわたくしの北洋世界（北大西洋・北海・バルト海）は対照的であるが、時代という点ではわたくしの事例は十字軍以前の時代、他方で関氏の事例は十字軍以降となる。したがって旅という現象は同じであっても、歴史的コンテクストが異なる点を考慮しなければならない。

それでは具体的にどのような点での比較を試みるべきだろうか。三点提示したい。第一に記録の問題である。紀元千年前後の北欧にトゥデラのベンヤミンが記したような自伝的巡礼記は存在しない。スカンディナヴィアの旅の記録は、より遅い時代にようやく記録されはじめた。何がこの差を生み出したのであろうか。旅を記録する史料の類型や史料から取得される情報の質を比較することでなにか見えてくるかもしれない。第二は移動の条件である。関哲行氏の事例では、中世後期の地中海世界では宿泊施設や先人の旅行案内といった移動のための公共的条件は整備されつつあったことがわかるが、紀元千年前後の北欧に同様のものを見出すことは困難である。それにもかかわらず、スカンディナヴィアでもさまざまな理由で人々は移動をしていたという事実は厳然として存在する。移動の条件の差異を比較することで、二つの時空間の差を見出すことができるかもしれない。第三は支配者との関係である。旅というとわれわれ私的なものを想像しがちであるが、ヒエロニムス・ミュンツァーがそうであったように、支配者による政治行政上の目的に沿った事例もある。実のところ支配者を讃える詩をよむスカルド詩人の移動も支配者の移動と深く関連している。支配の問題として旅という行為を見直すことも可能であるかもしれない。